



第 22 号
平成 23 年 12 月
野木小学校同窓会編集部

「穏やかで自然豊かな

野木の里」



第54回卒(昭和38年)
同窓会長(武生) 山田 儀一

同窓会員の皆様におかれましては、益々ご健勝にて活躍のこととお慶び申し上げます。さて今年度の役員改選にあたり、私に会長にとのこと、まだまだ先輩諸氏が沢山居られる中、なぜ私に：：再三の要請にお断りする術もなく、やむなくお引き受けすることと成りました。浅学非才な私ではありますどうぞ宜しくお願致します。

今年日本列島は大きな災害に見まわれました。三月十一日東北地方を襲った東日本大震災による津波被害、それに伴う東京電力福島原子力発電所事故。九月の台風十二号による浸水、土砂災害など、未曾有の災害となり多くの尊い人命が失われ、今なお復旧の目処さえ立っていない状況であります。被災された方々に衷心よりお悔やみ申し上げますと共に御見舞い申し上げます。また我が同窓会の中にもこの地で暮らし、被災された方は居られなかったかどうかと心配も致しております。どうか一日でも早く復興されることを願ってやみません。節電対策や熱中症に悩まされ

れた暑い暑い夏も過ぎ、先日すがすがしい秋晴れの下、我家の裏山でもある箱ヶ岳に登ってまいりました。つい先日まで黄金色に穂っていた稲穂もすっかり刈り取られ、所々に転作田の白いそば花と真赤な彼岸花を眼下に、新しく開通した舞鶴若狭自動車道、小浜市街地から小浜湾、遠くに若狭富士こと青葉山を眺めながら、十数年前まではこのあたりにも沢山の松茸が生えていたのになア：：と昔をしのび我が郷土の自然豊かな秋を満喫して参りました。

野木の里に生まれ育ち、この地でしか生活したことのない私ではありますが、被災地のことを思うと、穏かで自然美が豊かなこの地に住んでいる幸せを実感した一日でもありました。災害は何時どこで起こるか解らない昨今であります。未来を担う子供達が学ぶ野木小学校、野木地区の皆さんの災害避難施設でもあります我が母校も、建設後四十数年を経過致して居ります。子供達が安心して学校生活

が送れるよう、来年度耐震化リフレッシュ工事を実施して頂く事と成っております。毎日子供達の元気な声が聞こえる我が母校、土日にはスポーツ少年団の野球やサッカー、夜は体育館での太鼓の練習やソフトバレー等、広範囲に利用され野木地区民の憩いの場所でもあります。そんな母校の発展を祈りつつ、同窓会と致しましても何か役に立ちたいと思っております。舞鶴若狭自動車道小浜インターの開通により、野木の中央を通る県道も随分車の量が増えました。少しずつ変わり行く野木の里。年一回発行の会報ではありますが、地元会員をはじめ、全国に暮らす会員の皆さんに届けたい。そして、この

会報を通して会員どうしの心の掛け橋に成ればと願っております。



同窓会長退任のご挨拶

「心の中の写真」



第47回卒(昭和31年)

(兼田) 藤田嘉昭

小生、平成二十一年、二十二年度と同窓会長をお引き受けし、何もできないまま三月末に任期を終えました。もとより、会長というような重責

当時は写真撮ること自体高価なものでしたから、人物以外の風景などはほとんど撮らなかつたように思います。

を果たせる器でもなく、評議員の皆様や事務局の岩崎教頭先生には本当にお世話になりました。また、会報への執筆依頼では多くの皆様に快くお引き受けいただき、こころ温

見守り隊をお引き受けしてから今年で六年目、最初の二年間はほとんど徒歩でした。それから後は、何かあった時のためにと自転車を使いまし

まる原稿に触れさせていただきましたこと、この場をお借りして深くお礼申し上げます。

そんな毎日の活動の中でいつも考えることは、写真の残っていない昔の風景のことです。

さて私の小学生の頃は今から約六十年前。当時はカメラをもっている人はほとんどなく、写真といえば、小学校の記念誌にあるような講堂や校舎、同級生の顔ぐらいいしか浮かんで

私の家は兼田「旧・加福六」の集落の一番東にあります。当時集団登校はありませんでしたから一人で登校です。小学校へ登校するには、今は我が家の自販機の裏を通って

できません。まれに、集落や家庭での大切な行事の時の写真があるくらいです。また、

た県道へ出て加福六のお地藏さんに向かいます。お地藏さんも左側にありました。もち

ろん現在の県道はなく、狭い砂利道が続いていました。

農協支所の事務所前を通り、少し緩やかに左へカーブしながら現在の野木公民館の建物

の道を走り、兼田のお宮さん前を目指します。当時はお宮さんのすぐ前に道がありました。

そこから少しずつ右方向へと道は続き、稲架け用のはん

の木や小川を見ながら小学校の校門を目指します。道からはたしか小川を超えて少し上がると校門でした。子供にとつては「やっと着いた」という感じでした。

そこから先は記念誌の中にも本物の写真がありますから、記憶を呼び起こすという点ではほとんど問題はありませ

ただ、自分のイメージとしては、当時の校舎は現在と比べて、上から見た時計回りです。少し右にひねられて建っていたように

思います。未曾有の東日本大震災では、瓦礫の中のアルバム写真をさがす場面がよく報道されます。ほとんどの方は見つけることができなかったと思いますが、

どうかこれからは、せめて心の中の写真を大事にして、心安らかに、力強く、今後の人生をがんばって欲しいとお祈りいたします。



野木小学校長 湯浅 邦夫

元気な学校づくり

のために

会員の皆さまには益々ご健勝のことと存じます。日頃より深いご理解と温かいご支援を賜っておりますことに心から感謝申し上げます。今年

は東日本大震災があり、災害にあわれた多くの方々に対しまして謹んで哀悼の意を表し、お見舞い申し上げます。野木小学校出身の方々はいかがでしたでしょうか。

さて、六年ほど前から福井県の全小中学校のスクールプランが、県のホームページに掲載されています。どの学校もそれぞれの教育目標に沿った教育内容を実践することで、地域・保護者に対して信頼ある学校にしていくことを目指

しています。それぞれの説明責任を果たすこととなります。

野木小学校も「輝きのある野木の子」を教育目標にして、知・徳・体のバランスのとれた児童を育成していくことをめざしています。

めざす子ども像は、「進んで学ぶ子」(知)、「自他を大切にする子」(徳)、「明るく元気な子」(体)と掲げ、「知」では「根拠を持って説明できる」、

「徳」では「自信を持って良いと思う行動ができる」、 「体」では「進んで健康な体づくりに取り組む」というように目標行動を決め、具体的な項目を三つずつ挙げてあります。

また、野木小学校では、福



井型コミュニケーションスクールとしての役割はもちろん、家庭・地域との連携を通してあいさつ、早寝・早起き・朝ごはん運動、履き物をそろえる取組をしたり、手伝い・家事労働など地域の中で取り組んだり、地域の名人から学ぶ取組を行っています。そして幼・保・小・中の連携を行い、交流活動、キャリア教育につながるように支援・連絡会議を持っています。

あいさつ運動を取り上げてみると、集落グループでのあいさつの取組に対して、表彰してほめることで、子どもたちを育てていこうという取組をしています。そして、有線放送で子どもたち自らがあいさつをして頑張りますので地域の皆さんもご協力お願いします、という放送を流し、それを聞かれた地域の方々の中にも「元気が出る、元気をもらえる、頑張つて声をかけ合います。」と言つて下さる方もおられました。学校では、それを聞いて子どもたちに伝えて褒めています。そうすることで元気な学校をつくるこ

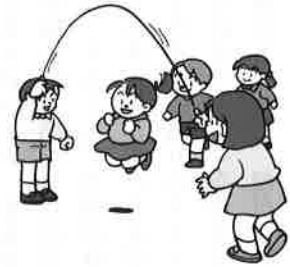
とが出来ると考えています。取組の一端を述べましたが、同窓会員の皆様が、今後益々ご活躍されますように、また皆様のご健勝とご多幸をお祈りして、言葉足らずですが会報へのごあいさつに代えさせていただきます。今後ともご支援ご指導を賜りますようお願い申し上げます。

旧職員・会員からの便り

我道一以之貫

(昭和37年度・59年度 職員)
(平成2年度〜4年度 校長)

第38回卒(昭和22年) 鹿野公夫



箱ヶ岳に：野木山に：北川に沿う道に：：：母校で毎週月曜日の朝礼に歌つたのが昨日のように感じます。

保護者、地区の方々、環境に温かい御支援は今なお忘れたいことはありません。教育実習二週間から始まり、以降三回勤務しました。が、それぞれ校舎、校庭などの環境が全く違いました。木造・鉄筋・

校舎の大改築と、校庭も毎回変わりました。

木造校舎は小・中九年間学んだ思い出がいっぱいあります。蝶、音楽など厳しかった羽織袴姿の岡本秋先生、やさしい声で励ましていただいた川口次子先生、後に髪を結いふつくらとしてやさしかった田中悦子先生、ピアノ習字の上手な杉谷しげ先生、国民学校か

ら小学校、新制中学という学制改革の難しい時期に、オーラウンドの中川平太夫先生、最後には、国語、社会の得意な小林政弥先生、担任ではなかったが、英語を解りやすく易く丁寧に教えて下さった奥本一校長先生、何かに人より秀でておられた福田善正先生に部活などお習いし、特に書道の初期基本を暗くなるまで指導していただきました。どの先生も心に残る言葉や態度で育んでいただきました。その中でも、中川先生の「反省なき者に進歩なし」という言葉は今でも心の支えになっています。

学校前の県道を走る時、「脇見運転はだめ」と思いながらも、チラッと校舎、校庭、児童達を眺めます。ホッとしますし安らぐのです。

そんな母校に十月より、四年〜六年の篆刻クラブの授業を任されたのです。夢にも思ってもみなかった事で、年齢を忘れて楽しく児童と一緒に頑張りたいと思います。今は地元三宅小と瓜生小、中学校選択授業と楽しく前向きに参

加しております。暦年の「喜寿」も過ぎましたが、児童、生徒達に迎えられる共に力を合わせ、認め合つて学べる事は何と有難いことか、教室に入ると、今でも現職のような錯覚をおこします。

日頃は、農作業(主に畑作物)高齢者対象のサロン楽楽会のお世話などなど、好きな書道の作品制作を年齢相応に時間を利用しています。児童、生徒を通じて、真面目で集中力と根気のある「働き者」の「野木の子」に接し、嬉しくなります。今後も野木地域の特性や感覚を失わずに、「小学校・同窓会」併せて野木地区の皆さんの益々のご発展をお祈り申し上げます。



楽しかった五年間

(平成16年度～20年度 職員)
第60回卒(昭和44年)

堀 中村 正人

「小学校もいいもんだぞ。これからは、小中学校両方経験しておかなければならない時が必ず来る。」とある上司から言われた。上中学校で七年目を終えるところだったので、異動対象者の一人になっていた。「この歳で今さら…」と迷ったが、一発奮起四十七歳で二十五年間の中学校勤務に別れを告げ、とりあえず第一希望に母校である「野木小学校」と書いた。異動希望は、百％希望通りにはいかないのだが、運よく第一希望で通った。よく地元は知った人が多いので、敬遠する傾向があるのだが、人見知りで環境が変わると飯ものどに通らなくなる(?)

だったので担任を希望した。校種が変わると何が大変かというところ、最初に子どもに対する言葉遣いである。呼び捨てが君・さんづけに、「うせなあかんぞ。」が「うしましやうね。」といった具合で、言語環境に慣れるまで一カ月以上かかった。また、国語、算数、理科、社会、……とほとんど

の教科を教えなければならぬのだが、二十六年前に教育実習でしかやったことがない。国・算・理・体・道・総合・学活だけとはいうものの、「書き順がちがう。」と言われな

いか、毎時間ハラハラドキドキの連続だった。五年間お世話になり、第九十七回卒業生(5・6年)と第百回卒業生(4・5・6年)を担任することができ、二回卒業生を見送った。九人と十人とならない人数だったが、ケンカが絶えず、行事がある

と主役になりたい者ばかりで、個性もいろいろだった。しかし、学年が進むにつれて心も体も大きくなり、少しずつ成長してきていることを見ることができ、彼らから新米小学校学級担任として教わることが多かった。五年生の三学期は、最も大きく成長する時期である。それは、六送会の準備を五年生がしなければならぬからだ。それまで、六年生が児童会活動の中心で学校を引っ張ってきたわけだが、六送会は五年生が中心となり計画から実施までをしなければならぬ。五年生の三学期の最初の授業は、この話から始まる。「成功させなかつたら、来年の児童会はないと思え。」(中学校風)と脅しをかけながら、緊張感と責任感と使命感を全員に持たせる。もちろん、教師の意図する方向へ子どもたちを導くのであるが(高度のテクニ

ックを要す)、あと本番まで一週間ともなると、健気がいんばろう一生懸命でかわいらしい。自然とリーダーが育つ

変わらない校舎と思い出

第69回卒(昭和53年)
中野木 山口 京子

てきて、周囲も協力しようとす。この学級のまとまりで、卒業式も五年生が下級生を仕切っていく。そんな伝統が脈々と引き継がれている。地域の方々も子どもたちのために、惜しまな

い協力をしてくださる。そのありがたみを子どもたちも感じているから真つ直ぐに育っているのだろう。もし、次回異動希望を書けるとしたら、即「野木小学校」と書きたい。野木小学校を卒業して三十二年が経ちました。ふり返ってみると、やさしかった担任の田辺先生、中西先生、高学年になると、个性的だった川端先生、こわざとやさしさ両方の松宮先生。担任ではありませんが、いつもニコニコやさしく微笑んで大きな手のひらで毎日握手して下さった美術の松宮先生、校長の塚本先生が、夏の臨海学校で、ふんどしで泳いでおられた姿、乾布摩擦をされていた姿は印象的です。放送部に入っていた私は、体育館が出来る前の木造の講

堂で、朝礼が終わる頃になると放送室までダッシュし、その足音を聞いた放送室内の部員がレコードに針を落とす。そして教室へ戻るための音楽が流れるということをしていました。今では笑えますが、その時はスムーズに音楽を流す使命に燃えてダッシュしていたものです。また、集団登校では学校までの約二・五キロメートルを毎日歩きました。季節の花をながめ、風のおいを感じて歩きました。踏んで歩くとサクサク音をたてた霜柱。雪が積もって冷えた朝には、雪の上を歩いて直線最

短距離で学校に行きました。神社で遊んだり、ぐみの木に登って食べたりしても叱られたことはなく、いつも地域の大人に見守ってもらっていたように思います。

三年前に第一回野ぎく駅伝に参加し、アンカーで、一言神社からゴールの野木小学校まで走りました。子どもの頃の通学路を楽しんで走る……つもりでしたが、そんな余裕はなくもつれる足で何とかゴールできました。結果は一般男女混合チームの部で優勝でした。

私は今、看護師として、訪問看護の仕事をしています。仕事の内容は、障害を抱えている方や要介護高齢者、ターミナルケアの必要な方、高度な医療機器をつけている方などの自宅に訪問し、日常生活の看護、リハビリテーション、医療的処置などを行うのですが、看護師というと病院で働くイメージが強く、ポロシャツとジャージ姿で訪問する私たちの仕事は、「何する人？」の説明から始まることも多く、もっとアピールしていかなく

ればと思っっています。住み慣れた家と地域での生活を支援するこの仕事をできるだけ続けていきたいと思っっています。

今の職場には、職種も年齢も違いますが、五人の野木小同窓生がいます。顔を合わせれば小学校時代の思い出話で盛り上がっています。五人の内一人は紅太鼓で、もう一

少年野球の歓声を聞くと

第78回卒（昭和62年）

福井市 居関吉記

人はソフトバレーで定期的に野木小の体育館に通っています。こうして社会人になってからも利用できるのは嬉しいことです。子どもの頃からずっとそこにあつて、どつしりと包み込んでくれる場所。それが野木小学校です。変わらない校舎とそこでの思い出こそが自分の宝物です。

早いもので、福井県庁に入庁し9年目の秋を迎えます。

今回、改めて小学校時代を思い返して、四半世紀の間が経過したことに驚きました。大学進学と同時に県外に出てしまい、入庁後もずっと福井での勤務が続いていますので、今では野木に帰るといふより、お邪魔するという感覚になっ

てしまいました。実家にお邪魔する時は、大抵、野木小学校の前を通るのですが、グラウンドからはいつも少年

ある試合でのこと、ワンナウトランナー三塁。1点を入られれそうなピンチの場面でした。県大会の予選だったと思えます。

バッターの打った球が三塁を守る私のところに飛んできました。私は捕ったボールを一塁に投げる振りをして、つられて飛び出した三塁ランナーに飛びつきタッチ、アウト！これこそ、小学生の私が密かに考えずと練習していたプレーだったのです。

私はチームのピンチを救い得意満面。ベンチに向かって誇らしげに手を振ったのを感じています。

でも、何か皆の様子がおかしい。監督も主審に抗議しています。ふと横を見ると、なんとアウトにしたはずのランナーが三塁に立っているではありませんか。

判定はセーフだったのです。監督の抗議も通じず判定は覆りませんでした。

チームを助ける完璧なプレーから一転、皆の足を引っ張る結果に。悔しくて、涙をこらえながら次のバッターを睨

み付けて守備に就きました。その時、チームやベンチのみならず掛けられた、「ドンマイ」「ナイスプレー」の聲が忘れられません。

残念ながら結果は上手いかなかつたけれど、これが自分で考えて実践するということの、初めての経験でした。

時は流れ、私も二人の娘の父親になりました。野球はずっとしていません。鬼監督だった父親も、今では孫の言いなりの好々爺になり、昔の面影はありません。

しかし、野木小学校のグラウンドや聞こえてくる歓声は、私が小学生だった当時のままです。今でも野球少年の歓声を聞くと、あの時の悔しそうな顔でじつとバッターを睨み付けている自分の姿とチームメイトの「ドンマイ」の聲が甦ります。

なにか悔しいような懐かしような、不思議な気分になさせてくれる野木小学校のグラウンドと、そこで野球をしている後輩たちの声を聞くのが好きです。

絆

第78回卒(昭和62年)

杉山 橋本好史

東日本大震災後、家族や恋人と過ごす時間を増やしたり、結婚したりする人が急増したそうです。人が心のよりどころや居場所を再確認し、「絆」を強く求めたからかもしれない。

私は3人兄弟の末っ子ですが、ふるさとに帰ってきました。

自分を育ててくれた家族と野木が好きだったからです。父は毎朝6時に墓参りをし、ご先祖様に家族一人ひとりの名前を挙げて無事を祈ってくれます。(この前母から聞きました。)私は悪さをして倉に入られて泣いたこともあります。母は厳格な父とは真逆で、どこまでも私の味方をしてくれるやさしい存在です。ちよっぴり甘いくらいです。幼い頃から、二人にあたたかい家族の「絆」を感じて育ってきました。

「みんな手をにぎり輪になって、心にも太陽輝き〜♪」

(野木小学校校歌)

校歌にあるように、野木で生活していると、よくあたたかい地域の「絆」を感じる事ができます。小学生の頃、杉山に帰ってくる

と、畑で働いていた近所のおじいちゃんやおばあちゃんが必ず「おかえり〜」と声をかけて迎えてくれました。私たちも「ただいま〜」と返事をしていました。大人になった今でも、車で仕事から帰ってくる時、「おかえり〜」と言われ心がなごみます。



「よっちゃん、がんばつるのお〜」とか「こどもは、大きくなつたかあ〜」と、まるで地域みんながあたたかい家族のようです。都会では、隣にだれが住んでいるか分からないマンション暮らしが多く、

こんな関係が築けないのでは? とふと思うこともあります。そう思うと、地域の人の

「絆」は私にとって手に入れたい貴重な財産です。お互いが顔見知り、地域の「絆」で結ばれている野木のふるさ

とで子供を育てたいという願いも、帰ってきた理由の一つです。

今年縁あって杉山自衛消防団の班長や体育委員をさせていただき、多くの区民のみなさんと声をかけ合うことができました。運動会の案内を配っている時、あるおばあちゃんとお話をしたら、「兄さんと話していると元気になるわあ」と涙を流して喜んでくださいました。正直、驚きでしたが、なんだかとてもうれし

く感じました。野木に住む私たちには、「絆」という大きな財産があります。人との交流は心のよ

りどころとなって安心感をもたらせてくれます。大人は大切に守っていききたいですし、子どもたちには「絆」を感じてもらいながら育ってほしいと思っています。

ふるさと野木がこれからもずっとあたたかく、かたい「絆」で結ばれた場所であるよう心から願っています。

腕に覚えあり

第80回卒(平成元年)

相模原市 田中多恵

逆上がり。足から鉄棒を回るだけのこと。それが出来ず、小学三年生の私は特訓をすることになった。鉄棒の向こう

の装置は体育館の隅に常設され、跳び箱を蹴ることが私の日課となった。

に跳び箱を積み、それに立って掛けた踏切板を蹴り上げて鉄棒を一周するというものだった。跳び箱を徐々に低くしてゆき、いつの間にか補助なしで回るようになるという寸法だ。そ

段が下がると途端に体が鉄棒を越えられなくなり、みづともなく引力に負けてしまう。力任せに跳び箱を蹴り、派手な音を立てて崩してしまうこともあった。それでも何とか一番低い補助、踏切板だけに

辿り着く。そこから苦戦した。成功しないことも苦しかったが、今まで補助の高さを利用して回っていただけに過ぎないことがわかってしまった。苦しかった。勢いでも腕力でもない、回るための何かが必要だとはわかってはいたが、それを掴めず、踏切板付きと補助なしの鉄棒を行ったり来たり。

苦しい時は続いたが、落ち込んではいなかった。特訓を止めようと思ったこともなかった。成功までこの先どれだけの時間がかかるか想像もできなかったが、安心して鉄棒に挑んでいた。それは友達が練習を見に来てくれたことや、職員室からの視線があったことが大きかったと思う。誰も出来ないことを責めたりはしなかった。良い報告のできな私を急かしたりもなかった。た

だ静かに見守って、いつかのその時を待っていてくれたのだと思う。

これが私の逆上がりについての思い出だ。過去、あれほど努力したことはなかったように思う。周囲に温かく見守られ、ついに私は、逆上がりが自力で出来るための何かを掴むことに成功する。それは突然やつてきた。地面を蹴ること、腕を曲げて体を鉄棒に引き寄せること、その二つの動作が自分の中で繋がりを持った。足りなかったのはその



二つを発動させるタイミング。先日、近所の公園で試してみた。鉄棒を握りこむ。鼻につく鉄鏝の匂い。肩の力を抜いて、軽く地面を蹴る。その一瞬、両腕はタイミングを間違えず、体を鉄棒に引き寄せる。体は勢いそのままに鉄棒を回る準備をする。逆さまの視界、それもつかの間、体が鉄棒に

触れればすぐさま両足は着地へと向かう。覚えていた。最後に鉄棒を握ったのが、いつだったかは忘れてしまったと言うのに、体のあちこちがタイミングを記憶している。嬉しかったこと、努力したこと、周囲に支えられていたこと、たくさんの思い出と一緒に。

新成人からの便り

大人になつたと感じることに

第95回卒(平成16年)

下野木 田中惇也

小学校時代の仲間との再会を思いながら、地区体育大会に参加するために帰省したとき、同窓会誌の原稿依頼を聞きま

した。私は今、教師になるという夢をかなえるために、愛知県

の大学に通いアパートでひとり暮らしをしています。

野木を離れ自分で生活する

ようになつた私は、今まで感じなかつた新しい感覚を持つ

た。母は練習でドロドロに汚れたユニホームを洗濯してくれていた。

そんな日々が当たり前だった私にとって、大学生活のひとり暮らしはあまりにも初めてのことはばかりで、何をどのようにしたらいいのか、持ち得る知識の少なさに愕然とする毎日でした。食事は自分で作らなくてはならず、部活で汚れたユニホームも自分で洗い、小遣いはバイトをして稼ぐという生活をしているうちに、自分が今までどれほど家族に頼っていたかを痛感した。

たまに野木に帰ると、温かく迎えてくれる家族があり、自然にすつと肩が軽くなり、ほつとしていた自分がいるのを知っている。先日の帰省中のこと、自分自身が大人になつたと思える瞬間があつた。それは父との会話の中でふと感じたものだった。

父親と最近の話をしたときだった。最初は大学生活や野球といった他愛もない話から始まったのだが、父のお酒が進むにつれ、いつものように独壇場になつていった。父は



自分の思いや考えを矢継ぎ早に練り出し、私の話しかけるタイミングがみつからない。私は会話にならない時間がたまらなく嫌いで、今までは本気で聞こうとはせず聞き流してきたことが多かった。その時

でもまた始まったかと内心面倒に思っていたが、よく聞いてみると、大学の講義や実習では私が祖父母の送り迎えも

けでなく、家族のためにも何ができるかを考えるように変わってきた。自分を感じました。

先ずは、これから社会の荒波にもまれる中で、信頼される人間になるために、言動に責任を持ち、幅広く多くのことを学んで、夢の実現にむけて努力を続けていきたいと思っています。

あの頃、子供太鼓を打つ小学生の男子は、ずらーっと並んでいたけど、最近は打つ子供が少なくなり、踊りも中学生まで参加していると聞ききました。

また、祖父にも車で送り迎えしてもらっていたが、今では私が祖父母の送り迎えも

家族への恩返しが立派な人間になることへの第一歩だと思

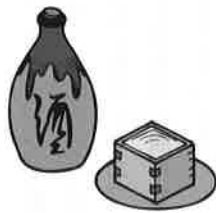
て努力を続けていきたいと思っています。

さらに、集落センターなどで遊ぶ子供を見かけなくなると母が言っていました。子供の数が少なくなったことと、ゲームなど屋内で個人で遊ぶ環境ができたことから、友達

成人式を迎えるにあたって

第95回卒(平成16年)

堤 伊藤 史 織



「まさか悼也の車に乗せてもらう日が来るなんてなあ」と大変な喜びようで、私もとても嬉しく心地よかったです。

私が野木小学校へ入学したのが、平成十年四月六日、ちょうど三月二十七日に下の弟が生まれ、にぎやかだったことを覚えて

集落センターや誰かの家に集まってかくれんぼしたり、一輪車に乗ったりして遅くまで遊んだことを覚えて

私は今神戸にいます。目の前のバス停からは、いろいろな方向にバスが何本も出ており、十五分走れば、西宮という大きな町に行けます。食べる

今まで頼ってきた分の恩返しができるチャンスがたくさんあることに気づかされ、自分のため

そのころ、堤区の同級生は五人。しろうめくさを積んだり、ちよつと休憩してお茶を飲んだり、積んである岩に登つて

夏には、集落のお祭りの祇園祭「浦安の舞」の練習やドッジボールやミニバスケットの練習に汗を流し、学校のプールにも毎日通いました。

でも、こんな便利な毎日の中で、新鮮な魚や取れたての野菜が、無性に食べたくなります。そんな時には、堤に住

った「ありがたさ」を感じて
います。

昨年一年間「若狭町故郷サ
ポーター」をさせていただき
ました。友達にパンフレット
を配ると「自然がいっぱい
いいなあ。」と言ってくれ、
改めて田舎の良さを感じて
います。

次に帰るときには成人式で
みんな元気になっているかな？

成人式で開けようと小学校卒
業時に埋めたタイムカプセル、
何を入れたっけ……？今から
楽しみにしています。



当たり前だと思っていたこと

第95回卒(平成16年)

玉置 新田 美穂

生まれてから十八年間過ご
した野木を離れ、私は現在岐
阜で大学生活を送っています。
大学に入り、友達と話して
いて驚かされたことがあります。
それは小学校の給食に「リク
エスト給食」という日がある
ことです。リクエスト給食と
は月に一日あり、順番が回っ
てきた学年が考えたメニュー
が実際の給食メニューになる
というものです。

私はこのリクエスト給食が

前にあるものだと思っていた
のですが、そうではなかった
のだと知り逆に私のほうも驚
きました。

岐阜での生活が一年半を過
ぎた今、当たり前だと思っ
ていたことが、実際はそうでは
なかったと思うことが、他に
もたくさんあるなあと感じます。

地域の人たちがあたたかい
ところ、自然が溢れかえって
いるところ、食べ物がおいし
いところ、野木つ子には独特
のしゃべり方やノリがあるこ
ころ・・・など自慢できるこ
とがたくさんあります。

大学では栄養学を専攻して
いるのですが、「食」につい
て勉強している私にとっては、
生まれ育ったところがこの野
木でほんとに良かったと思っ
ています。

登下校の道の周りには田ん
ぼや畑があり、田植えから稲
刈りまで、また旬の野菜がな
る様子など自然に目にするこ
とが出来ました。これも当た
り前のことだと思っていたの
ですが、私の大学の友達では、
家の近くに田んぼがなく、お
米は買って食べるため精米し

ます。

たお米しか見たことがない子や、
野菜がどうやって成っている
のかを知らない子もたくさん
います。

もしかしたら私が食につい
て興味を持ち、学びたいと思
ったきっかけは、毎日何気な
く見てきた風景にあるのかも
しれません。

実家を離れるまでは「ここ
ってなんもないなあ」と正
直思っていた
のですが、そ
れは当たり前
だと思ひ込ん
でいて気がつ
かなかつた
のであって、
野木にはたく
さん自慢でき
るところがあ
ると気づきま
した。

そんな野木
で家族、先生
方、地域の
方々に支えて
もらって成長
できたことが
本当に幸せ
です。

です。



これからも野木の自慢でき
るところをたくさん見つけて
いきたいと思ひます。

児童作文(家庭の日の作文)

ぼくのお父さん

六年 田中晟椰

「泊まって帰ってくるわ。」
 と言って泊まったので、妹と二人で留守番をしました。正直言うとぼくはいやでした。でも、ぼくは、妹の食器を洗ったり、洗たく物を洗って干したりしました。お母さんが帰ってきて、

「ありがとう。」

と言ってくれた時、すごくうれしかったです。お父さんは二ヶ月間入院して、大みそ日の日に退院しました。元氣になつて、よくしゃべるようになってよかったです。お父さんは、風呂に入れなかつたので、足がカサカサになっていました。かみも伸びていました。

お父さんは、退院してしばらく家にいました。そして、通院しながら岐阜にもどりました。そして、今年六月にじ令が出て、七月から敦賀支店になつて、家から仕事に通うようになりました。ぼくは、

「やったあ。お父さんが帰ってくる。」
 と言いました。すごくうれしかったです。お父さんがいると、家族でUNOができたり、毎

日いっしょにご飯を食べたり、ねたりできます。ぼくは、お父さんの帰りを待っているとワクワクします。本当に毎日楽しいです。

家族六人そろふことが、とても幸せです。

家族は私の宝物

五年 倉谷和華

私の家族は、お父さん、お母さん、お姉ちゃん、おじいちゃん、おばあちゃんです。この家族は私の宝物です。お父さんは、がんばって仕事をしてくれています。私がかからない宿題も教えてくれるし、私の良くないくせも直すように言ってくれます。お母さんは、仕事も家事もがんばってくれます。毎日、私とお姉ちゃん

の気持ちをお父さんに伝えてほしいです。お姉ちゃんは、よくおこるけど時にはやさしいお姉ちゃんです。勉強も少しは教えてくれるのでいいです。ただ、けんかはまだまだ続きそうなので、他の人にめいわくをかけた程度にできたらいいです。おじいちゃんや夏休みにはプールへ送ってくれたり、友だちと遊ぶときに送ってくれたりするし、見守り隊にも来てくれます。たまに、オレンジャー

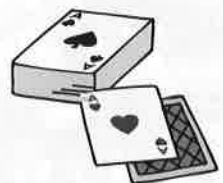
ぼくのお父さんは、ぼくが二才の時から単身赴任で、仕事をしています。その時は、石川県はくい市で原発の増設の仕事をして四年三ヶ月いました。一度だけ家族で、お父さんの仕事場を見に行ったことがあります。その時、妹はまだおしめをしていました。そして、半年ほど敦賀支店に帰ってきて、ぼくがののはな保育園を卒園する一ヶ月前に、岐阜に行きました。岐阜の時は、お父さんのアパートに家族でとまったり、三重県や愛知県に出かけたりできたので、うれしかったです。でも、お父さんに会えるのは、月に一・二回だったので、すごくさみしかったです。それでも、お父さんは遠くでがんばって仕事をしていますので、すごいと思えました。

そんなお父さんが、昨年十一月に病氣になつてしまいました。「えっ、あのお父さんが……。」とお父さん、大丈夫。」と聞いたら、「うん、うん。」としか言つてなかつたです。ぼくは、すごくえらいんだなあと思いました。始めは、お母さんが日帰りで岐阜中央病院に見まいに行きました。そして、ぼくもお父さんの見まいに行きました。お父さんは点灯を二十四時間打たれていました。しんどそうで、ぼくは見てるのがつらくありませんでした。おじいちゃんとおばあちゃんも見まいに行くようになり、時には、お母さんが、「日帰りえらいし、アパート

家族でUNOができたり、毎

二か月ほど前で、それまでが

おすしを持って帰ってきて、



わたしにくれます。おばあちゃんの家で、

「ミカン食べるか。」

「洗たく物入れんとあかんで。」

と、いろいろ気づかってくれます。

私は、おじいちゃんとおばあちゃんを思いやらないといけないことでも、

「いやだな。」

という顔をしたり、思ったりしてしまいます。でも、おじいちゃんとおばあちゃんは、わたしのことをとても大切に思ってくれています。私は家族とけんかしてイライラすると

「もうきらい。」

と思ってしまう。でもすぐに話せるようになるということ、きらいではないということだと思えます。

私は、この家に生まれてきて良かったと思います。私の家族は優しいです。あまいときもあります。きびしいときもあります。でも、こわいときがあつても、毎日楽しいです。みんなもおもしろいことを言ってくれるので、毎日笑って

過ごせます。私は、ときどき悲しいことを考えます。すると、

やっぱり楽しく、笑って過ごせる家で良かったと思います。

だから、こんな家族が私の宝物です。

ぼくの大切な家族

四年 杉谷 昂 亮



ぼくの家族は、お父さん、お母さん、おじいちゃん、おばあちゃん、そしてハムスターのトトです。トトは、去年の十一月の朝、目をつぶったまま動かなくなりました。

トトは、ぼくが小学一年生の春にお店で出会いました。

たくさんいるハムスターの中で、迷わずに決めました。そして、名前もすぐに「トト」と決めました。トトはブルーサファ

リアのメスのハムスターで、ねずみとはちがい、丸い小さいしっぽをしていて、とてもかわいらしかったです。ぼくはトトといっぱい遊びたかったけれど、ハムスターは夜行

になるとげん関のくつの中でねむっていました。だれにもふまれずに見つかってよかつたなと思えました。

こんなに元気なトトだったけれど、ぼくが小学三年生の春には、こしと後ろ足が悪くなつてきました。階段を上つたり、回し車を回したりできなくなりました。そして、

かたい食べ物が食べられなくなり、大好物のひまわりの種も自分で皮をむくことができなくなりました。毛のつやもなくなりやせてきました。それで、ぼくはえさを食べやす

いようにくだいたり、ひまわりの種の皮をむいたりしてあげました。そうするとたくさん食べるようになり、暑かつた夏を乗り切ることができました。ぼくは、トトは不死

身だから、ずっと生きられると思っていました。でも、ちがいました。きのうまでは元気がしていたのに、朝、えさをあげようと「トト」とよんでも起きてきません。ぼくはこわくなりました。そおつと、

トトの家をのぞくと目を閉じたまま動きません。ねむって

いるように見えました。夕方になつても起きてきませんでした。それでぼくは、お母さんとおばあちゃんといっしょに、トトをぬのにつつんで、畑のすみにうめました。木でおおかをつくり、お花もそなえました。

ぼくは、この時初めて「死」を見てこわくなりました。目の上が熱くなり、なみだが落ちてきそうになりました。こんなに悲しい気持ちは初めてでした。お母さんは、

「トトは生まれ変わつて、また近くにきてくれるよ」と言ってくれます。ぼくもきつとそうなるような気がします。



お父さんのこしふみ

三年 竹村 ゆうと

ぼくのお父さんは、毎日いそがしいです。お仕事もがんばっているし、仕事から帰ってきてでも、すぐごはんを食べて、用事でよく出かけます。ぼくがねてから、帰ってくることもあるので、

「たいへんだな。」
と、ぼくは思います。
ぼくは、父の日に、「かたたたきけん」を作ってプレゼントしました。でも、お父さんはこしがいたいのので、「こしたたきけん」にかえました。ある日、お父さんはおふろからあがってきて、ぼくに、「ゆうと、ちょっとこしたたいて。」
と、言いました。ぼくは、「えー。」
と思ったけど、プレゼントのけんなのでがんばることにしました。お父さんは、

「やっぱり、ゆうと、のって

くれや。」
と、言いました。だから、ぼくは、腰に立って足ふみをしました。お父さんは、

「ようきくわ。」
と、よろこんでくれました。

ぼくは、うれしかったです。それからは、しょっちゅう

「ゆうと、また、こしのつてくれんか。」
と、こしたたきけんがなくなつても言います。ぼくは、ときどきめんどうくさいときもあります。だから、お父さんに、

「なんで、ぼくばかり言うの。」
と、聞きました。お父さんは、

「ゆうとの重さがちようどいいんや。」
と、言いました。
「じゃあ、ぼくがせなあかな。」
と、思いました。

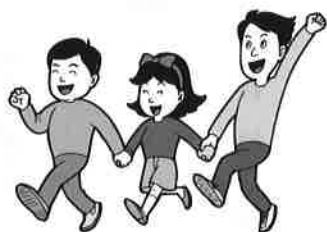
お父さんは、ぼくがならつ

ているじゆう道やスイミングのおくりむかえも、してくれません。だから、ぼくも、お父さんのこしふみをがんばろうと思います。

きつと、今日の夜も明日の夜も、ぼくは、お父さんのこしふみをしていると思います。お父さんにたのまれたら、

「いいよ。」

と、言おうと思います。
お父さん、毎日ごろうさま。お仕事がんばつてね。



わたしのひいおばあちゃん

二年 くら谷 心な

ひいおばあちゃんは、あまいものが大すぎで、あんパンやまんじゅうやアメなどをよく食べていました。わたしにも

「あんパン食べるか。」
と聞いてくれて、半分こしてくれました。
ほいく園から帰つてくると、アルプス一万じゃくをしてあそんでくれました。
わたしが一年生のときに、ひいおばあちゃんの体がわるくなつて、ひまわりそうに行きました。いつも家にいたひいおばあちゃんがいなくなつてさみしくなりました。ときどきばあちゃん、ひまわりそうにようすを見に行きました。いつもと同じひいおばあちゃんでした。ひまわりそうでおまつりがあつたとき、いっしょに昼ごはんを食べました。カレーライスをおいしそうに食べて、デザートもたくさん

食べて元気だったひいおばあちゃん。
今年の五月十日の夜中になくなりました。朝、おきると、なくなつたことを知りまして、ひいおばあちゃんの顔を見ながら、学校に行きました。
おそうしきにはたぐさんの人が来てくれました。おわかれなんだと思うと、きゆうになさしくなつて、いとこたちとたくさんなきました。天国へ行つてもあまいものがたくさん食べられるように、ひつぎの中にたぐさん入れました。
おぼんは、ご先さまのれいが帰ってくるので、ひいおばあちゃんも天国から下野木の家に帰ってきてくれたと思えます。すがたは見えないけれど、近くにひいおばあちゃんがいると思うとうれしくなりました。
十五日の夜、じいちゃんと

一年生 日記から

一年

くわはらりか

せんせいあのね、きょうバウムクーヘンをつくったよ。

おかあさんといっしょにつくったよ。おかあさんは、かぞくがおおいから二ばいのぶんりょうにしてくれました。

わたしはバターのたんとうでおかあさんはらんぼくのたんとうでした。おかあさんは、

「ミキサーをつかわんとがんばるわ。そのほうがもっとおいしくなるとおもうし。」
といつてがんばりました。た

いちもすこし手つだつてくれました。二つをまぜてやきました。ちよつとこげたけど、じょうずにできました。

できたら、きつてほとけさまにおそなえをしました。けんたにいちやんとこうすけにいちやんがかえつてきたらみんなでたべました。

みんなやにいちやんたちは、「めつちやおいしい。」
といつてくれました。とつてもうれしかったです。こんどはさつまいものおかしをつくりたいです。

一年

ないとうゆな

せんせいあのね、きのうピアニにいったんだよ。まだごうかくでできていないけど、わたしとしてはじょうずにひけたとおもったよ。こんどはごうかくでできるようにがんばりたいよ。

十月十五日にはつびようかいがあつたよ。
二ねんのかすみさんと三ねんのひがし山ゆうかさんもい

たよ。わたしがひいたきよくは、森のポルカだったよ。ちよつとむずかしかったけど、じょうずにひけたよ。

こんどもはつびようかいにでたいとおもったよ。とつてもたのしかったです。

一年

くわはらたいち

きょう、げんかんそうじをしました。

まずげんかんにあるものをそとにだしました。シューズラックをぞうきんでふきました。

ふいてから、ゆかもふきました。ぼくはいつもラックをどかしてなかつたのでほこりがたまっていました。ほうきではいたゴミをちりとりでとつてそとのゴミばこにすてました。ぼくがまい日とつていたのでゴミがすくなかったです。つぎにそとにだしたくつをもとにならべました。とつてもきもちよかったです。おかあさんがなんかいもありがとうといつてくれました。



野木小学校のクラブ紹介

今年から、四年～六年生のクラブの活動に、地域の方々に指導者として参加いただき、明るく楽しく、伝統的な技や文化、ふるさとの歴史、環境について学んでいます。

◆民踊クラブ
速水のり子先生



◆読書クラブ

奥本 康代先生



◆演劇クラブ

木下 昇先生



◆太鼓クラブ

清水千枝子先生



◆歴史クラブ

町歴史文化課の方



後期クラブ

◆民踊クラブ

つじ会の方



◆ソフトバレークラブ

ソフトバレー協会の方



◆篆刻クラブ

鹿野 公夫先生



◆ものづくりクラブ

内藤 節子先生



◆環境クラブ

アースサポーターの方
町企画環境課の方



編集後記

同窓会員の皆様には、いかがお過ごしのことでしょうか。母校や、同窓会員の近況などをお知らせする「野木小学校同窓会報二十二号」ができあがりましてので、お送りさせていただきます。

今年の日本は、未曾有の東日本大震災、記録的豪雨など、多くの災害に見舞われる年となりました。中には、被災地にて生活をされている同窓会員の方もいらつしやると思いますが、心からお見舞い申し上げます。

さて、原稿執筆をお願い致しました皆様方には、ご多忙の中、快くお引き受けいただきました。お陰を持ちまして、充実した内容の会報に仕上がりました。編集委員一同、衷心より感謝申し上げます。

会員の皆様におかれましては、今後とも、近況などを投稿いただければ有り難く存じます。また、ご家庭のご兄弟やお子様が、就職や転勤等で住所を変更された場合は是非事務局まで連絡をお願い致します。末筆ながら、会員の皆様の益々のご健康とご繁栄をお祈り申し上げます。